

明治六年癸酉八月刻成

寧靜學人著



# 西洋夜



養愚堂梓

東京書肆

翰林堂謹啓

2121

緒言

蓋人間の造化を我亜細海中より  
 て西洋小創まりし小あはれに但民口の  
 増小随ひ漸々四方より分ち西洋へと移  
 りゆらなり故小此書は表題より顯る  
 るる如く専ら西洋の古事或語るもの  
 と雖も欧羅巴、亞弗利加の事跡と語  
 らんとしきは先亞細亞の古跡と言さ

西洋夜

養愚堂



多を得は是初集より六の芽五集まで  
亞細亞の西方より古國を揚て其大畧  
成記一以て芽六集以下政邦二洲の發  
端とす所以あり看官まらむ成察せ

明治六年龍集癸酉八月

寧靜道人源彝識



西洋夜話第五集目錄

○亞刺比國由來の事

附 摩哈麥奈起の事

○沙羅仙國創立の事

附 同國滅亡の事

○西利國及ヒプー子シヤ國の事

附 小亞細亞國の事

○スキチヤ國の事



西洋夜話 五集 附 天竺國の事 石川氏藏

附 天竺國の事

西洋夜話 第五集 目錄 畢

國會館

西洋夜話 第五集

東京 亞刺比國由來の事

寧靜道人 彙著

附 摩哈麥發起の事

抑亞刺比國人を亞伯拉罕の子に以實馬  
耳の後裔ありと云ふ昔先知者あり以  
實馬耳と觀て曰く此人を常小諸人と  
戦ひ諸人を小け人と戦ふんと果して

西洋夜話 第五集 石川氏藏



其言の如く兎角戦争絶ざりしを以て  
馬身一代の如く其より以來千歳の  
後不至るに其より諸國の人乃  
敵りて諸國の人皆亞利比人此敵  
り亞利比は其由は諸國の諸  
州の如くも全國の思を北の方ハレ  
チ子メソポタミアなどくる國々  
隣り東の方と波斯湾とオルモスの湾

と小臨人南の方を印度洋に沿ひ西の  
方は紅海に玉きり國內大概沙漠  
其廣大ありと言ん方なり國民常  
恒居を定めし沙漠も大沙漠も天  
と張て一時の恒居と又彼處も  
此處も移りて諸處に遍歴を此國  
の太古の事も言傳も少くして確  
ねど後世も残りて珍説も摩哈變と

西洋雜記 五集 石川氏雜記



亞刺比人旅行之圖



大の事なり山人西洋紀元五百七十年  
 即ち我神武天皇即位紀元一千二百之  
 十年亞刺比國默加府小生色二十五  
 生は駱駝と曳て沙漠城隍素一諸  
 小貿易して生業してたり不國深山  
 の奥小入て洞穴小住之神と祈り經城  
 念し十餘年と送たりとて其  
 前より河く生きりる佛敎猶太敎と所

西洋紀元 五集 三 石川氏藏



と思ひ別小教門と聞んとの考  
る由斯て摩哈麦と早くも四十歳の  
春と迎て先知者とたり山より出て人  
小向ひ云ら申う予天の命と受て新  
しき教と聞ん為小再ひ世小出さ  
とつんど黙加府の人と初より其去地  
小生ま駱駝士たりも能く知  
は誰りく信抑もる者おく同凡夫  
は

り更小人小異るもあられは別小靈  
験の何らびきやうもなりとつひなる  
小摩哈麦と諸人の思の外ある虚言哉  
吐き刺ガブリールとつひ人と共小  
驪馬小騎て夫小登りきりきど所期も  
ふ多事成語きは黙加の人々々大小怒  
りして摩哈麦と打殺さんと駱駝まき立きは  
為方おく黙加と立退き麦地拿とつひ

西洋文法 五巻 石川氏 補註



西洋傳記 五集 西川集 卷之...

府小二三年と雖も其教小入る者  
夥多もれり摩哈麦ら教身小祝て  
りるやう一旦狀教小入る者ら諸人成  
勸て此教小入しむ魚一若穩知小諭  
て聞入る者も威力よく入しむ  
とららあぞ摩哈麦の教徒ら兵起  
教小入る亞刺比人と討りり數度  
の勝利と得る忽ち亞刺比國と攻取

のみは西利國とも併せて攻取  
然るは摩哈麦を教主きりのみ  
以今々真の要刺比國王とあり其威光  
益強く且性未容毅威烈しき人  
日侍従りる人とも恐まぬ者ら  
りり若怒もる時々眉毛の間小黒筋  
張出て其恐し言らんおおく其有様  
と見まは身も縮む計あきは大小人と



威服せしめて其の勢愈猛うりしのご  
由六十之歳の時俄に没りりらと云  
然きど其教も亞細亞、亞非利加の二大  
洲に充滿し今田々教と稱し其教と  
奉らる者教百多人有り教の大意を可  
爾とりし經文に載し其文の意を即  
ちガブリールが天より降りし摩哈麦  
の傳きし言なりとりし

○沙羅仙國創立の事

附 同國滅亡の事

亞刺比國のうら摩哈麦を嗣きり  
國と沙羅仙と其始祖摩哈麦理り  
てより今の亞細亞都兒格の地に残ら  
るに取し其外諸國を攻取て一大國と  
りテギリス河の邊にバグダットと  
大都會と建きり始摩哈麦の嗣を其婿



阿<sup>あ</sup>里<sup>り</sup>と<sup>り</sup>子<sup>こ</sup>者<sup>者</sup>ふりし<sup>し</sup>摩<sup>ま</sup>哈<sup>は</sup>麦<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>妃<sup>ひ</sup>亞<sup>あ</sup>埃<sup>え</sup>奢<sup>しゃ</sup>の<sup>の</sup>推<sup>おし</sup>  
埃<sup>え</sup>奢<sup>しゃ</sup>と<sup>と</sup>子<sup>こ</sup>者<sup>者</sup>と<sup>と</sup>相<sup>あ</sup>善<sup>ん</sup>ら<sup>ら</sup>以<sup>も</sup>亞<sup>あ</sup>埃<sup>え</sup>奢<sup>しゃ</sup>の<sup>の</sup>推<sup>おし</sup>  
量<sup>り</sup>る<sup>は</sup>夫<sup>お</sup>摩<sup>ま</sup>哈<sup>は</sup>麦<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>婿<sup>むこ</sup>阿<sup>あ</sup>里<sup>り</sup>小<sup>こ</sup>弒<sup>ころ</sup>せ<sup>ら</sup>  
さ<sup>も</sup>ら<sup>と</sup>思<sup>おも</sup>ひ<sup>は</sup>は<sup>は</sup>亞<sup>あ</sup>埃<sup>え</sup>奢<sup>しゃ</sup>と<sup>と</sup>遂<sup>す</sup>に<sup>に</sup>軍<sup>ぐん</sup>  
兵<sup>へい</sup>と<sup>と</sup>集<sup>あ</sup>む<sup>む</sup>ち<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>伐<sup>は</sup>率<sup>い</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>阿<sup>あ</sup>里<sup>り</sup>と<sup>と</sup>戦<sup>たた</sup>ひ<sup>ひ</sup>事<sup>こと</sup>  
る<sup>る</sup>小<sup>こ</sup>其<sup>その</sup>苦<sup>く</sup>戦<sup>せん</sup>甚<sup>し</sup>く<sup>く</sup>亞<sup>あ</sup>埃<sup>え</sup>奢<sup>しゃ</sup>と<sup>と</sup>駱<sup>らく</sup>駄<sup>だ</sup>の<sup>の</sup>背<sup>せ</sup>  
小<sup>こ</sup>槽<sup>そう</sup>と<sup>と</sup>懸<sup>か</sup>て<sup>て</sup>こ<sup>こ</sup>れ<sup>れ</sup>を<sup>を</sup>乘<sup>の</sup>り<sup>り</sup>一<sup>い</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>步<sup>か</sup>率<sup>そ</sup>小<sup>こ</sup>  
響<sup>こ</sup>取<sup>と</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>戦<sup>たた</sup>争<sup>い</sup>の<sup>の</sup>間<sup>あ</sup>に<sup>に</sup>小<sup>こ</sup>響<sup>こ</sup>取<sup>と</sup>の<sup>の</sup>步<sup>か</sup>

率<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>響<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>取<sup>と</sup>きは<sup>は</sup>忽<sup>た</sup>ち<sup>ち</sup>討<sup>た</sup>取<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>を<sup>を</sup>代<sup>た</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>  
響<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>取<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>者<sup>もの</sup>も<sup>も</sup>亦<sup>また</sup>討<sup>た</sup>取<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>を<sup>を</sup>代<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>者<sup>もの</sup>も<sup>も</sup>  
代<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>者<sup>もの</sup>も<sup>も</sup>皆<sup>みな</sup>斃<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>遂<sup>す</sup>に<sup>に</sup>七<sup>しち</sup>十<sup>じゅう</sup>八<sup>はち</sup>の<sup>の</sup>步<sup>か</sup>率<sup>そ</sup>伐<sup>は</sup>  
失<sup>し</sup>ひ<sup>ひ</sup>き<sup>き</sup>り<sup>り</sup>而<sup>し</sup>て<sup>て</sup>終<sup>つ</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>阿<sup>あ</sup>里<sup>り</sup>乃<sup>の</sup>方<sup>の</sup>勝<sup>か</sup>利<sup>り</sup>と<sup>と</sup>  
得<sup>え</sup>た<sup>た</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>其<sup>その</sup>権<sup>けん</sup>威<sup>い</sup>愈<sup>い</sup>々<sup>々</sup>と<sup>と</sup>摩<sup>ま</sup>哈<sup>は</sup>麦<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>教<sup>きょう</sup>法<sup>ぽう</sup>  
と<sup>と</sup>残<sup>のこ</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>討<sup>た</sup>取<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>國<sup>くに</sup>々<sup>々</sup>伐<sup>は</sup>  
係<sup>けい</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>は<sup>は</sup>是<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>國<sup>くに</sup>と<sup>と</sup>沙<sup>さ</sup>羅<sup>ら</sup>仙<sup>せん</sup>國<sup>くに</sup>と<sup>と</sup>号<sup>ごう</sup>  
け<sup>け</sup>其<sup>その</sup>王<sup>おう</sup>と<sup>と</sup>可<sup>か</sup>里<sup>り</sup>事<sup>じ</sup>と<sup>と</sup>称<sup>し</sup>し<sup>し</sup>き<sup>き</sup>り<sup>り</sup>叔<sup>し</sup>歷<sup>り</sup>代<sup>だい</sup>の<sup>の</sup>



可里弗らバグダト小住居して六百二  
十年の其間子孫相續して王位と踐ふ  
其國を保ちけりし其由は最も高  
名りし可里弗らマモードガシウと  
し者として智略あり征討と好み天然  
國の一部とも討伐之を多しあり其  
頃曾て一人の貧民ありマモードガシ  
ウ小祈出たりは兵隊の者一人彼貧

民の家小来り戸主小手向して家族を  
戸外小逐出し終夜我物魚小其家を横  
領したりと曲小苦情を述ぐる小可里  
弗らされ城圍て心の内小思ふやう士  
卒を我子たり然るれを彼出卒成戒し  
しらは本意小何れと思つべきや  
小彼祈人小向ひ兵隊の者再ハ斯る悪  
業と為さば予小告来すと言々是は貧







もかくおて変り顔色あはは可里弗  
 を果し憐情と憐一實ハ我子汝多小  
 掛て殺せし如く愁歎まくらとらや  
 然程に沙羅仙國を摩哈麦の教令と嗣  
 て兵伐起し諸國の諸部と攻取て強國  
 とあり既ハバグダトとらハ大都會と  
 由建て歴代の王と可里弗と尊稱し皆  
 摩哈麦の子孫と立し中ハは智勇ハ

可里弗もりて愈國民富榮へ武威  
 盛ありし其故の可里弗ハモス文七  
 ムとら者り驕奢教慢し民  
 汝見ると出友の如く自ら慢心し思  
 不やう事面を賤民の見ると汝場一き  
 ものり何れとて金砂の覆面と作ら  
 しものさ成急て面と覆らされ人小  
 對せん若出て道路よ馬車と走らし

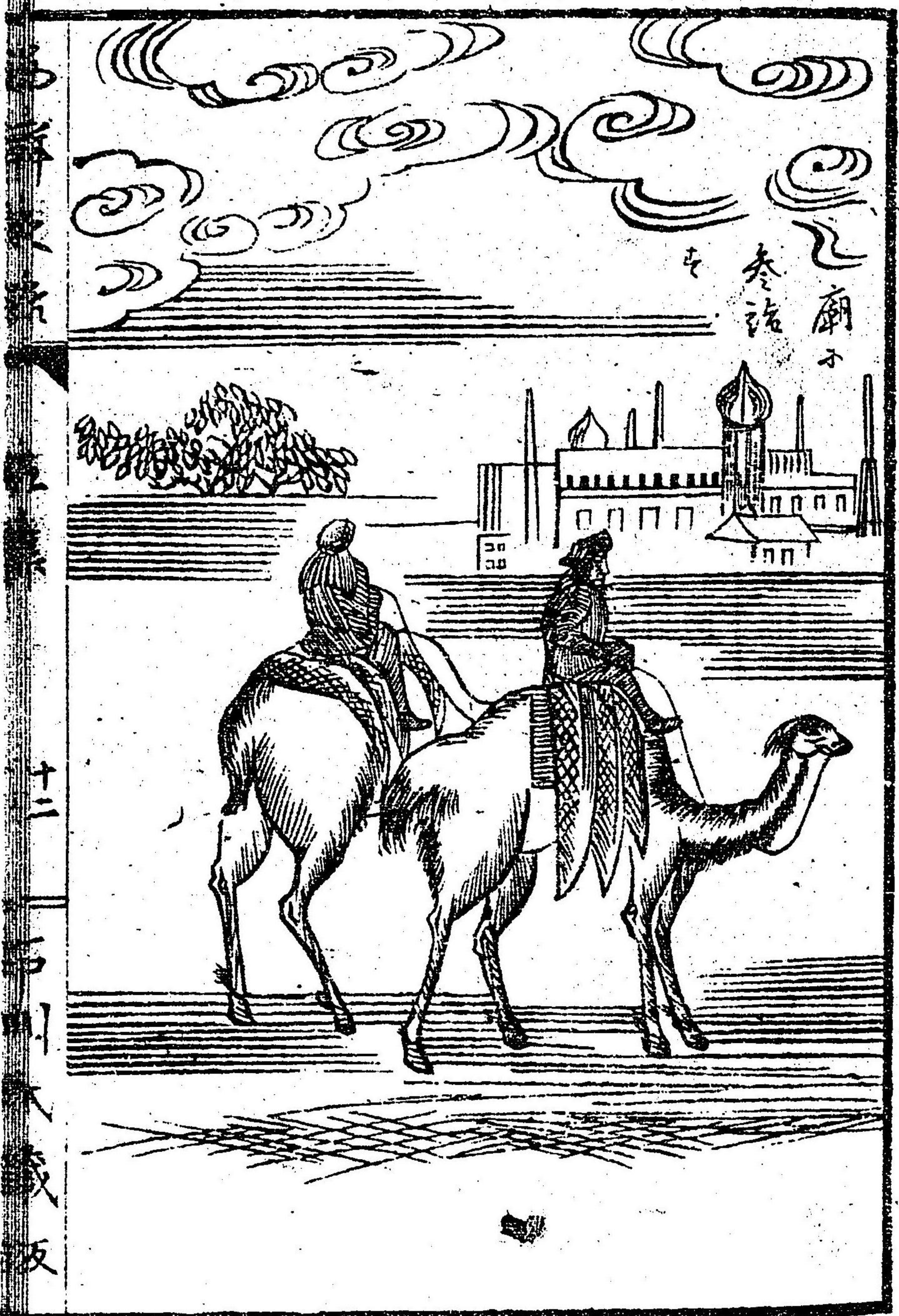
西海新報  
 五集  
 石川氏藏  
 十  
 石川氏藏



まは常お教子の人民路傍不出て金砂  
震面の光明と挿みきりとりふ斯て欠  
榮華を極むる由小鞭鞭の首長と  
ラキとり者沙羅仙国小討入りバグ  
ダトを攻取り可里弗モスタセムを生  
捕す金砂の震面と剥取り生あつら華  
の袋小入是モ一セスとり者  
帝中と引廻しめもりと今前小此中

と過きり時を金砂の震面成輝  
人小挿れ今を囊中の氣となりて  
る恥辱を受け終ははお殺さるる沙羅  
仙国と共小亡いゝ々實小つゝあま浮  
せなり是を西洋紀元一千二百五十八  
年の事とて國を跡形もなく滅めれ  
と摩哈麦の開ききる田々教を後世小  
傳りてらるる成奉らる者今も猶哉







見人ありと知らん

○西利國及ヒプー子シヤ國の事

附小亞細亞の事

抑西利とくらの國を亞細亞洲の西隅

小つらと地中海の峯に沿ひ東の方を

イウヘレト河に接し亞刺比國と界

南に廻りてパレスチ子國に境を接

へ北の方を小亞細亞小界と此國を昔

より兵を好み大維王の時代より西洋

紀元の頃より絶に猶太教の人と戦ひ

其より羅馬の属國となりて漸く軍戎

止めたり史中人西洋教の經文に法

所小見へきる國より其頃外國にア

チオチとくらの都あり世界に名高き繁

衆の大都會あり西洋教祖耶蘇の地

等らうとくはきる者多し又ガマス



と、府あり太古アブラハムの時代  
より既にありきる府ありて其頃か名  
高き都ゼルセレムより六十八里程離  
るゆへ所ありて西洋紀元後五百年の頃  
身パウルトリノ者城府小設教して大  
小西洋教と弘むきとて多し経文  
に出るの後せ城府を刀劔及物類の製  
造の巧ありしとて以て諸國の珍重せら

れしとて今も其術と失ひく妙成賞  
せしとて然きと當時は絹布の  
製造小妙と得て世よ名高き所とあり  
其絹布は地名成取てタマスク織と  
りて此外西利國よりて經文より見へ  
る古き府はタドモルとて所ありて  
漢の中より是る種魯門王交易便宜  
の爲小建きる府ありて廣さ十里ありき



こと今も大なる零落きり昔の姿の今も  
 残りゆら物と見ゆら花美小彫きら石  
 の柱などゆりて其昔の富榮ゆら思  
 中々きりり當時の府とハルミラと  
 又ちのダマスクスより西北の方  
 小十八九里程もゆるバルベックとい  
 ふ府ゆり是も昔も繁昌の出地として民  
 口も多しゆり今も衰微して僅か一子

餘人なり後世この府城へリオポリス  
 とゆり又又プー子シヤとゆり國を地  
 中海の峯小沼きら國として是もタイ  
 レシドン、プロトレメイスなどゆり高  
 名き都府ゆり此國を世界第一小先き  
 ち創て交易と開きゆれが為小航海術  
 なきもと古く始り國ゆり昔も盛か  
 る獨立國ゆり其後西利國の屬國



となりぬり然ど當時を西利國を都兒  
 格の管轄を受たきは随てプー子シヤ  
 由都兒格の管轄を交きと凡て都兒格  
 の屬國を繁昌せりと能く依て西利  
 プー子シヤに外の屬國と同く漸々  
 衰微の景況なり然きと西利と  
 号々大ふ廣まりて古昔の西利プー子  
 シヤのみありはパレスチ子國とも併

て西利と  
 小亞細亞は近年一名と納多利と  
 地中海の東北の隅にあり此國を華島  
 の姿として東の方を西利マソポタミ  
 ヤ、アルメニヤ乃之國小界と接ゆきど  
 も西北南の三方を残り海なり秋國  
 東西の長三百里南の廣二百里あり  
 當時を都兒格の屬國として位氏を大



抵回々教と信心と首府とシミルナと  
 政米諸國の海船此所  
 素りて無花果大棗其外の菓物と輸出  
 之故國を太古より早く人の住きし所  
 教度繁昌しきる事也格  
 別の大國となりたりたるとあり  
 西洋紀元  
 前八百年頃よりレヂヤとリノ王國の  
 り此國の亡ぶる時のまゝクルーシユス

とリノ人より大なる富多りて名高  
 き人なり今世より富豪あり人成指  
 てクルーシユスの如く富りたりし言  
 もり程あり然るに其王の時波斯國  
 王没箇士の為に攻りて波紀元前五  
 百四十八年か滅亡しり夫よ  
 りレヂヤ國より小亞細亞の大半と伴て  
 波斯國も帰服し紀元前之百二十二年



まして波斯の属国きりし故高名ある  
勇将亞歷山徳大王小攻取らきゆり其  
後紀元前之百年小至りて故のレヂヤ  
國の属玉きりしポンテスとリノ國獨  
立し強國とありしゆり小亞細亞の  
諸部皆ありて堤ひ多年繫累しゆり  
ぶミツリテトとリノ王の時子至り  
連々羅馬人と戦ひ遂小兵法に熟し良

將とも得て久しく羅馬國小敵對しゆ  
りゆら小西洋紀元前六十四年よ至て  
ポンテス國を更なり其外小亞細亞は  
諸部も共小羅馬の属國とありゆらと  
りて斯て小亞細亞を連年戦争のゆり  
りありて民口を歳々増て諸部小繁茂  
の都府建たり中よりレヂヤ國のイペ  
シス府を最も華美ありし所として吐



あり寺院一所あり西澤寺のいと云  
 きつり然きと此寺院建てより百二十  
 年経てイロスタラテスとり人  
 あり己ら名と後世小砂さんと欲  
 彼美觀き寺院に火と放らりきは基礎  
 小至らきて悉く焼失たり此小亞細  
 亞は昔より華美あり都府多く西澤  
 新教の書より見ゆるとし殊小タル

シスといふ所を耶蘇の徒身パウロと  
 人の生國あり故にパウロ等大小  
 勉強して小亞細亞の諸部小耶蘇教と  
 開きぬれ此國は昔より其教を奉  
 ずる所多しといふ

○大キチヤ國の事

附 天竺國の事

此書初集より茲小至らきては何れも



像 偶 門 人 羅 婆 婆



亞細亞洲の西方に在る諸國の話を  
 大概高名ある國と揚名せしと  
 外亞細亞洲の守は猶古き大國少  
 しく其學問我邦に傳はるるは  
 支那天竺の如きは其學問我邦  
 人の知る所あり然るに亞細亞洲  
 北方はスキチヤト昔は名高き強國  
 其民開々以て猛勇にして戦闘と好

二十 二二 川 義 反



常小弓矢と携へて奪掠伐勤む故小  
 亞細亞歐羅巴二洲の諸國より屢兵を  
 出して攻めたりは克んば  
 退きぬれどもスキチヤ人を愈強を恃  
 之自國より開市する國を攻取らん  
 大軍を起し南方小出たりと幾度  
 とりて其内小スキチヤ人を近  
 國と併せてパルチヤとて國と建て

愈強國となりは波斯其外の國々  
 とも併せて大國となりて西洋紀元  
 前二百五十年より始まりて五百年の  
 間陸續に於國亡いてより昔のスキ  
 チヤ人の住むる所々後世總て韃靼と  
 し韃靼國も亦りて開市する國か  
 ら武勇の大將を數人出たり然るに  
 文ある國の悲さ小遠不立と能くん

西海紀行 五集 廿一 石川氏藏



て今を魯西亜の属國となりきり  
叔又天竺國を即ち東印度と云ふ所小  
しと土地甚廣し先にもりく如く  
此國の事を昔より我邦にも傳へりき  
れと夫を佛法の爲小傳へりき事な  
きは多くも佛法と信心する所の事の  
りして支那より文武の道百般の技術  
傳へりきゆりの類小なり我邦人の知

る所も多分佛法の行へり所のみか  
しと天竺の東南の方あり夫より暹羅  
安南緬甸の近國總て支那の邊を大小  
佛法の行へり所あり當時佛法を天  
竺に少くして却て支那に多し又西洋  
人の知る所も天竺の西北の方ありて  
佛法の行へり所あり其邊の教を  
傳へりきも尚古き婆羅門教と奉へり



あり今左に記す所を西洋人の説かれ  
る何れも天竺の西北の話と知るべし  
西利國の女王設弥羅密の攻入きり  
由亞歷山大徳大王の攻入きり  
皆其西の  
方より今印度坦と云ふ所あり  
百年程  
以前より英國人大小地を權威を得  
て遂に屬國となりたり然るに安政四  
年より至て土人反きり大戦争あり  
双

方の死者傷者甚多くして故又遂に英  
國の管地となりきり此國の人々太古  
より皆婆羅門教を信心しきり由其教  
法甚善し一は民小怠惰を教へて業  
を勤しめ以婆羅門とて異形の偶像と  
作りて奉尊とす一は其教は小神  
其外種々の偶像あり何れも魔道の  
の神と見へき異形の様あり是釋迦



西洋夜話 五集 石川氏藏

新小佛法と開ききり。所以のりり



西洋夜話 第五集 終

石川氏藏版新出書目

明治六年四月改

西洋夜話 第三集 第四集

海外雜誌 初集 卷二 卷三 卷四

西洋算法 卷三

おきか かなよふま 全三冊

東京書肆 翰林堂 京橋金六門 福田屋幸七發兌



洋教語

五集

230.1

I623a